

「アール・ヌーヴォーとガラス—ガラスアーティストの視点から」

近岡令 (ガラス作家)

今回の展覧会は日本で初めて見られる素晴らしい作品ばかりです。この中からガラス作品2点をご紹介します。

一つ目はカタログの裏表紙にもなっている、エミール・ガレ作「洋蘭文花器」です。大きさや色の美しさもさることながら、たくさんの技法を使って表現された洋蘭の表情がとても美しい点が見どころで、ここまで複合的な技術を使って繊細な表現をしているものは現代のガラス作品ではあまりみられないと思います。

この作品は、吹きガラス技法で大まかな形をつくっています。琥珀色のガラスに、茶色や赤の複数の色のガラスを薄く被せて型吹きし成形しており、その後「酸」で表面を溶かし（エッチング技法）、石や銅板に削り砂をつけて削って（グラヴェール技法を使って）、花や葉を繊細に浮き立たせています。この削られた部分の透けて見える琥珀色のガラスの細かなムラが景色のようで、美しい奥行きを作り出しています。中でも表面のガラスをとて細かく削り込んだ花卉の表情は、まるで日本画のように薄さや形の立体感がうまく表現されていて、ジャポニスム文化に影響されて描かれているように感じます。



エミール・ガレ《洋蘭文花器》1900年頃

もう一つはアンリ・ベルジェとアルマリック・ワルターの「鍬形虫飾付き書斎机用セット」（ペン置き）です。この作品はパート・ド・ヴェールという技法で作られています。これは石膏型の中に細かく砕いたガラスの粉を詰め、陶器を焼くような窯で時間をかけて溶かしこむ技法で、先ほどの作品の吹きガラス技法とは全く異なる作り方です。



アンリ・ベルジェ、アルマリック・ワルター
《鍬形虫飾付き書斎机用セット ペン置き》 1910年代
どちらもブダペスト国立工芸美術館蔵

ガラスという素材は、色の再現性がとても難しいのですが、このクワガタの形とその色が本物の標本のように見えます。また虫の細部まで丁寧に表現していて動き出しそうで、作者の造形力と技術力の高さを強く感じます。ペントレーになる周囲の器のブルーはとても瑞々しく、透明感もありクワガタをより引き立てています。

アール・ヌーヴォー期のガラスには、ジャポニスムの影響を受けながら、新しい作風を作り出そうという熱意や、様々な創意工夫が感じられます。



近岡令 (ちかおか れい / Chikaoka Rei)

<経歴>

- 1993年 武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業
- 2011年 第19回テーブルウェア大賞入賞
- 2013年 国際ガラス展・金沢2013 審査員特別賞
- 2014年 東京藝術大学大学院美術研究科ガラス造形コース卒業
アメリカ Bullseye Glass E-merge2014 Kilncaster Award
- 2016年 オーストラリア University of Sydney 交換留学
- 2017年 オーストラリア Australian National University アーティストインレジデンス
- 2018年 アメリカ Bullseye Glass Portland アーティストインレジデンス
- 2019年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課工芸専攻ガラス造形領域 修了
ガラス工房スタジオポジ 主宰
武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科ガラスコース 非常勤講師
日本ガラス工芸学会 正会員 理事